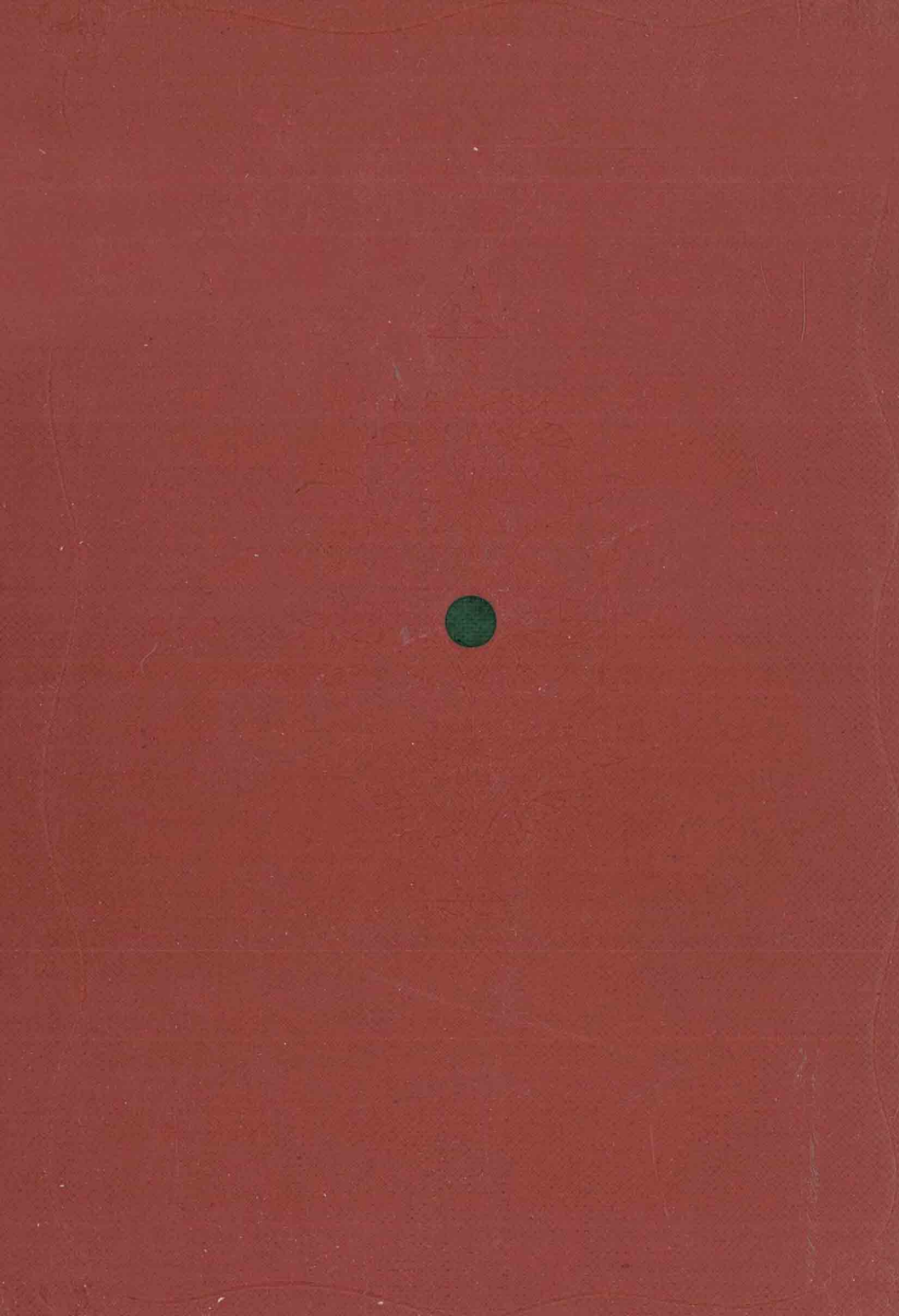




日本古典文學大系 12

宇津保物語 三

岩波書店刊行

宇津保物語 三

日本古典文学大系 12

昭和 37 年 12 月 5 日 第 1 刷 発行 ©  
昭和 50 年 12 月 20 日 第 14 刷 発行

定価 2300 円



校 注 者      河 野 多 麻

東京 都 千 代 田 区 一 ツ 橋 2-5-5  
発 行 者      岩 波 雄 二 郎

東京 都 青 梅 市 根 ケ 布 1-385  
印 刷 者      白 井 倉 之 助

発 行 所      東京 都 千 代 田 区    株式 会社 岩 波 書 店  
一 ツ 橋 2-5-5

落丁本・乱丁本はお取替いたします

# 目次

|       |     |
|-------|-----|
| 解 說   | 二   |
| 凡 例   | 四五  |
| 國 讓 上 | 五一  |
| 國 讓 中 | 一四三 |
| 國 讓 下 | 二三五 |
| 樓 上 上 | 三六一 |
| 樓 上 下 | 四四三 |
| 補 注   | 五三五 |

## 解 説

### うつほ物語諸本の系統を探る

**巻名と別名** 「俊蔭」から「楼上」まで十四巻の巻名には最初別名はなかったのですが、いつの頃からか、或巻に生じた別名が本名に代ったり、また本名が別名になるという事が起っています。「流」系統の大部分にも「九」系統にも「梅の花笠」とある巻名の左側に「一名春日詣」と記した本があります（文化板本・浅井本）。ところが「河海抄」と狩谷望之本（考）書入）は「かすか祭」です。「たつのむらとり」に「一名おきつ白波」とした文化板本があるかと思うと、それが本名になって「イ一名たつのむらとり」とした「神一」があります。また「初秋」は不思議に無名巻（考）書入古本）とした本がありますし、題名はなくて「十一上一名トハカリノ名月又相撲ノセチエ」「十一」（浅井本・宣長記には「初秋」とあり、文化板本は更に「又内侍のかみ」の名まで添えています。また猪苗代氏古本（考）では「としかけ」の右側に「うつほの巻イ」、「たゝこそ」の右側に「田子イ」と朱書があり、「春日詣」の左に「並び」を附した朱書には「梅の花笠」「初秋」「たつの村鳥」の各々に「古本此名なし」とあるのが注意に値します。

「桂」巻が古くは「春日詣」とは別巻であったと思われるのは、この古本巻序の「春日詣」の左側に「桂」と朱書し「十九丁裏九行目左大将殿桂におもしろき所といふより下別に一卷となす」とあるからです。「桂」巻の名は、既に「河海抄」松風の巻に見え、長意本書入イ本、南葵文庫本書入古本、宇津保物語「考証」、同「二阿鈔」に挙げられており、独立した一卷である事は明らかです。興味があるのは、この一卷を加えて二十一巻とする本が、旧上野図書館所蔵神原本其一として現存している事です。現存諸本及び文献に載る巻序巻数は様々で、板本の如きは三十冊に及んでも、二十巻に纏まっており、「並び」が数を減らして十六巻という場合がありますが、常に巻名は十四で「吹上」と「楼上」は上下、「蔵

開」と「国譲」は上中下に分れて合計二十巻になります。然るに「榊一」のみがそれに「むめの花かさ補」とした一卷を加えているのは何かの示唆を含むと思われれます。

また「桂」巻の名が、第三系統二十巻本の「十二沖つ白波」に「付かつらの巻」とあります。且つこの巻名に「付かつらの巻」をもつ右の諸本は「梅の花笠」を「春日詣」としています。これら諸本と巻名も順序も皆一致しながら序数のない古本が「考」に載っています。「としかけ 藤原の君 たゝこそ 春日まうて 嵯峨院 祭の使 吹上<sub>上</sub> 下<sub>下</sub> きくの宴 あて 宮 無名巻 沖津白波<sub>付かつらの巻</sub> 蔵ひらき<sub>上中下</sub> 国ゆつり 楼の上<sub>上下</sub>」これをそのまま十六巻本にしたように見える他の古本の巻序が並び記されています。「第一としかけ 第三藤原の君 第三たゝこそ 第三三のならひ 第四ノ上嵯峨の院 四ノ下祭の使 第五上<sub>上</sub> 吹上<sub>上</sub> 五のならひ 菊の宴 第六あてみや 第七無名巻 第八沖津白波 第九第十第十一蔵ひらき 第十二第十三第十四 国ゆつり 第十五第十六楼の上」右の「第三三のならひ」が「四春日まうて、たゝこそそのならひ」、「第四ノ上」が「五」、「四ノ下」が「六まつりの使、さかの院のならひ」、「第五上下」が「七ふきあけの上」、「八ふきあけの下」、「五のならひ 菊の宴」が「九きくのえん、ふきあけのならひ」の順に二十巻となっているのが第三系統で、「並び」の扱い方で、十六巻となったり二十巻となったりしている事がわかります。こういう精密な関係を一目で見られるように、諸本の巻序を次頁に表で示しました。(巻序に基づくうつは物語伝本の研究)(文学第十九巻第一号)の表を整理し改めたもの)

巻名と本文の不一致 板本は別表のように巻序が甚しく乱れていますが、十四巻中一卷も巻の名だけは見失われていないのに、第一系統には「嵯峨院」の名がなく「吹上<sub>上</sub>」とあります。正しく名だけ変って、本文は両方とも「国譲<sub>下</sub>」である点で板本と第一系統とは一致しています。其他順序は違っても、「蔵開<sub>下</sub>」が「嵯峨院」、「国譲<sub>下</sub>」が「蔵開<sub>下</sub>」、「国譲<sub>上</sub>」が「同中」、「国譲<sub>中</sub>」が「同上」、「楼<sub>上</sub>」が「同下」、「同下」が「同上」である点も一致していますから、板本と第一系統及び第二系統②とは、巻序では全く類似が認められないのに、巻名と本文との関係からは同類と推定し得るのです。恰も延宝板本の補刻である文化板本が古本(第二系統)によって巻序だけは変えても、実質上延宝板本と同一であるようなもので、平瀬本も、「考」に掲げた狩谷望之所蔵本も、新宮城書蔵本、榊原本其二、巨勢利和所蔵本も皆同類です。そのうち、「宮」本と文化板本とだけは「楼<sub>上</sub>」の上下が誤っていません。榊原本其一も外観は板本系に似たところがあ

| 流布                               |            | 本系            |                | 第二系                           |                                  | 第三系                                 |              | 統                  |                            |
|----------------------------------|------------|---------------|----------------|-------------------------------|----------------------------------|-------------------------------------|--------------|--------------------|----------------------------|
| 板                                | 本          | 系             | 第一系統           | 第二系統                          | 第二十卷                             | 第三系統                                | 統            |                    |                            |
| 混乱卷序<br>三十冊二十卷                   | 無卷序<br>二十卷 | 第一系統          | 平瀬本<br>二十卷     | ①宣長記古本<br>②續二文化三年板本<br>宣長記古本二 | 兼寿本<br>十六卷                       | 紀氏本<br>十六卷                          | 前田家本<br>二十卷  | 九大本系               |                            |
| 蔵ひらき 上上<br>上上<br>【藤中納言は88】       | 一          | 一としかけ         | 一としかけ          | 第一俊隆                          | 俊隆                               | としかけ                                | 俊隆           | 一としかけ              | 一俊隆                        |
| 蔵ひらき 中<br>【かくて二日ありて51】           | 二          | 二藤原の君         | 二藤原の君          | 第二藤原君 藤原の君                    | 藤原の君                             | 並藤原君                                | 二藤原の君        | 藤原の君               | 二忠こそ                       |
| 蔵ひらき 下<br>【かくて右大將殿56(嵯峨院)】       | 三          | 三かすか祭り        | 三梅の花笠          | 第三たこそ 忠こそ                     | たこそ                              | たこそ                                 | 三たこそ         | 三たこそ               | 三藤原君                       |
| 楼のかみ 上上<br>上上<br>【かくてつとめて83(下巻)】 | 四          | たこそ           | 四たこそ           | 第四梅の花笠 欠卷                     | 梅の花かき<br>一名春日詣                   | 梅の花笠<br>一名春日詣                       | 三たこそ         | かすかまうて             | 四嵯峨院                       |
| 楼のかみ 下下<br>【三左右大臣殿72(上巻)】        | 五          | 四紫の使          | 五紫の使           | 第五さかの院 嵯峨院<br>【國讀下】           | さかの院                             | 四上さかの院                              | 四上さかの院       | さかの院               | 五梅の花笠                      |
| 菊の宴<br>【かくてし月の65】                | 六          | 五吹上上<br>【國讀下】 | 六吹あけ上<br>【國讀下】 | 第六吹上上 吹上上                     | ふきあけ上                            | 吹上上                                 | 四下祭の使        | 祭のつかひ              | 六まつりの使<br>さかの院のな           |
| 藤原の君<br>【むかし藤原の君54】              | 七          | 吹上上<br>【吹上上】  | 七吹上中<br>【吹上上】  | 第七吹上上下 吹上上下                   | ふきあけ下                            | 吹上上下                                | 五吹上上         | ふきあけ上              | 七ふきあけの上<br>七吹上下            |
| たつの村島<br>【六月はかりに31】              | 八          | 吹上上           | 八吹上上           | 第八祭の使 祭の使                     | まつりの使                            | 祭の使                                 | 吹上上          | 吹上上                | 八ふきあけの下<br>八祭使             |
| たこそ<br>【かくてまたさかの34】              | 九          | きくの宴          | 九菊の宴           | 第九菊の宴 菊の宴                     | 菊の宴                              | 菊の宴                                 | 五ならひ<br>五菊の宴 | ならひ<br>菊の宴         | 九ふきあけのえん<br>九ふきあけのな<br>九菊宴 |
| ふきあけ 上<br>【かくて八月中の24(下巻)】        | 十          | 六あて宮          | 十あて宮           | 第十あて宮 あて宮                     | あて宮                              | あて宮                                 | 六あて宮         | あて宮                | 十あて宮                       |
| ふきあけ 下<br>【かくて紀伊国47(上巻)】         | 十一         | 七たつのむらとり      | 十一たつの群鳥        | 第十一たつの村島 初秋                   | 初秋<br>の月名はかり<br>又すまひの節<br>又内侍のかみ | 初秋<br>の月名はかり<br>一名すまひの節<br>一名すまひの節会 | 七題ナシ         | 内侍のかみ              | 十一内侍のかみ                    |
| 祭の使<br>【かくてとのより48】               | 十二         | 八沖つ白波         | 十二初秋           | 第十二初秋 田鶴の村島                   | たつのむら鳥<br>一名沖つ白波                 | たつのむら鳥<br>一名沖つ白波                    | 八おきつ白波       | おきつしらなみ<br>付かつらのまき | 十二おきつしら<br>波付かつ<br>らの巻     |

|                                    |    |                |                |              |              |                |                 |               |       |
|------------------------------------|----|----------------|----------------|--------------|--------------|----------------|-----------------|---------------|-------|
| 嵯峨の院 上 中下<br>〔かくて中宮より104〕<br>(國護下) | 十三 | 九くらひらき<br>上    | 十三歳開上          | 第十三歳開        | 蔵開上          | くらひらき上<br>蔵開上  | 九歳披上            | 十三くらひらき<br>の上 | 十三歳開上 |
| 梅の花笠<br>〔かゝるはもととし月28〕              | 十四 | 十くらひらき<br>中    | 十四くら開中         | 第十四歳開<br>中   | 蔵開中          | くらひらき中<br>蔵開中  | 十歳ひらき中          | 十四くらひらき<br>の中 | 十四歳開中 |
| 初秋 上<br>〔かゝるはもとに左大将95〕             | 十五 | 十一くらひら<br>き下   | 十五歳開下<br>(嵯峨院) | 第十五歳開<br>下   | 蔵開下<br>(嵯峨院) | くらひらき下<br>蔵開下  | 十一歳ひらき<br>下     | 十五くらひらき<br>の下 | 十五歳開下 |
| としかけ 上<br>〔むかし式部大輔80〕              | 十六 | 十二国ゆつり<br>(上中) | 十六国ゆつり<br>(上中) | 第十六国護<br>樓の上 | 樓のうへ上<br>蔵開上 | 樓の上上           | 十二国護上           | 十六国ゆつりの<br>上  | 十六国護上 |
| あて宮<br>〔かくてあて宮28〕                  | 十七 | 十三国ゆつり<br>(上中) | 十七国ゆつり<br>(上中) | 第十七国護<br>樓の上 | 樓のうへ上<br>蔵開上 | 樓の上上           | 十三くにゆつ<br>り中    | 十七国ゆつりの<br>中  | 十七国護中 |
| 国ゆつり 上<br>〔かうてけふは左の大蔵80〕<br>(中巻)   | 十八 | 十四国ゆつり<br>(上中) | 十八国ゆつり<br>(上中) | 第十八国護<br>樓の上 | 樓のうへ上<br>蔵開上 | 樓の上上           | 十四くにゆつ<br>り下    | 十八国ゆつりの<br>下  | 十八国護下 |
| 国ゆつり 中<br>〔右の大蔵には83〕<br>(上巻)       | 十九 | 十五楼上下          | 十九上かとの<br>下    | 第十九楼上下       | 國護中(上)       | 國ゆつり中<br>(上)   | 十五ろふの上          | 十九楼のうへ<br>上   | 十九楼上下 |
| 国ゆつり 下<br>〔かゝるはもとに平中納言58〕<br>(蔵開下) | 二十 | 十六楼上下          | 廿たかとの下<br>(上)  | 第二十楼上下       | 國護下<br>(蔵開下) | 國ゆつり下<br>(蔵開下) | 十六ろふの上<br>ろのうへ下 | 二十楼のうへ<br>下   | 二十楼上下 |

混乱巻序は延宝五年板本が三十冊、東大本が二十巻、無巻序の二十巻本は上野本である。

第一系統は板本系と比べ、一応巻序が整っており、「嵯峨院」とあるのが「吹上上」、「三かすか登」とある他は皆板本系と誤が一致する。新宮城本は「初秋」が欠巻であるが二十巻本と一致する。第二系統は皆三十巻本であるが、「國護」が「樓上」の位置に転倒している諸本を②とした。これが甚だ多い。しかし第二系統の本来のものは①であつて、②はその後に故意に替へたものと思ふ。宣長記す所の古本が①と一致するが、「初秋」と「田鶴の群鳥」との位置がこの類だて転倒している。②文化三年板本の巻序は古本によるのであるが②の諸本は皆その古本に類するもので、文化板本の巻序に最も類似するものは浅井本であるが、浅井本には別名「内侍のかみ」がない。巻序は同じで別名のないのが「神原本其二」「弘訓本」「神宮

文庫本」「長意本」「刈谷本」で、②は皆四が「梅の花笠」であるが、「利和蔵本」は「四春日詣」、一名「梅花笠」「十二沖津白波一名田鶴村鳥」である。②には第一系統と同じような条件のもとに板本系と一致するものがある。「解二」「梅の花笠」欠「利和蔵本」である。「刈谷本」も亦 巻名と本文の不一致がある。「長意本」は僅かに「ろのうへ」の上下が違つている位であるが、「刈谷本」と甚だ類似し、本文は第一系統と一致するから二本とも板本系に通ずるものがある。「解原本其二」は二十一冊の十六巻本であるが、「桂」巻が「むめの花かき補」として、別冊になつてゐるから、実は二十巻本といつていいものであろう。これが「刈谷本」よりも板本系に近い。「ふきあげ」「ろのうへ」の上下が逆であり、「國護」の上中が逆で、「あて宮」の巻本が脱落しているからである。第二系統はどの系統よりも数が多い。十六巻本で

は、「兼寿本」や「紀氏本」のように、「三のならひ」「春日詣」「七無名巻」「七」「八おきつ白波」とあるもの「陽明文庫本」「椿斎本」「上野図書館本」考の古本である。「七」が「初秋」で他は同じものは慶長十五年転写本の「静嘉堂文庫本」「内閣文庫本」「横山由清校本」。「七」が「内侍のかみ」とあるのが「紀氏本」と考「中の猪出代本」である。「三下梅花笠」「七初秋」「八たつの村鳥」とあるのが「麗女校本」。二十巻本では、「前田家本」と一致するもの、「本居本」「内閣文庫本」「無識語本」「萩野本」「神宮文庫本」「無窮会本」で「萩野本」「内閣文庫本」を除いては「十二」に「付からる巻」の題名がある「紀氏本」にも。四梅文庫本「巨勢利和引用の土佐本・久永本」は「開梅花笠」「十二たつの群鳥」である。第三系統本を通じて、「解一兼内静紀」「阿秋」「梅」が「桂」巻を欠くことに注意したい。

ります。大橋長意本と刈谷図書館蔵本（巻序に基づくうつほ物語伝本の研究）文学第十九卷第一号参照）が新宮城書藏本と酷似しており、刈谷本は巻名と本文との不一致が一層新宮城書藏本に近いのですが、二本とも第二系統に属し、一見関係がないようです。しかし本文校合の結果は、長意本（補写国譲中下二巻）にあつては、補写本を除いた他の本文は殆ど一致しています（もともと「梅の花笠」の中の「桂」巻の錯簡は「宮」にあつて「長」はありません）から、平瀬本と同類ではないかと考えます。

右の他に板本と最も深い関係にある二本が加わります。一本は既に笹淵友一、中村忠行両博士が紹介せられた東京大学図書館所蔵本です。二十巻の袋冊子ですが、巻名（「菊の縁」「ろうの賀」に誤る）巻序は言うに及ばず、巻名と本文の不一致、其他本文の詳細に到るまで、板本に酷似しています。また、うつほ物語現存諸本中、振仮名のあるのは板本とこの東大本と岡本本とのみです。ただ東大本の振仮名は朱墨で書き加えたもので、板本の振仮名を写したのとも違います。且つ本文も板本より仮名遣の誤が目立ちます。他の一本は藤季貞書写本（旧上野図書館蔵、本書で「上」とした上野本）でこれも中村博士が紹介されています。上野本と東大本とを比べると、本文は板本により近く、誤は東大本や板本より少ないようです。勿論先に述べた板本の特徴はすべて具えています。著しい差異は上野本が無巻序だということです。尤も上野本の識語は「国譲下」（実は「藏開」）巻末に「右うつほ物語依或人所望早卒書写尤求嘲哢而已元禄辛未年孟春廿六日 藤季貞」と記しており、板本も同じ場所に「延宝五丁年初春吉辰開板」とあるので、十四巻の終の巻が「国譲下」（実は両本共「藏開下」）であつたものと考えれば、上野本にも巻序があつて或は延宝板本と同じ巻序だつたのではないかという疑問が起りますが、上野本各巻には序数が記してないのです。序ながら岡本本も萩野本も上野本と同様各巻に序数がありません。萩野本は表紙が綴子で、料紙にも鳥の子紙を使った胡蝶装の豪華な写本で、立派な餽餽の漆塗箱の中を三段に仕切つて一つ一つが数冊入れの曳出箱になっています。曳出箱の各々には正面にも巻名を金泥で記し、餽餽蓋に記した巻序は第三系統二十巻本に当ります。岡本本は袋冊子で、これも表題に序数がなく第三系統二十巻本の巻序に整理されています。或は萩野本のように元は箱の蓋に記してあつたのかも知れません。上野本も、この二本が三系統の巻序によって整理されているように、偶々巻末に「国譲下」を置く第二系統②の巻序に置かれていたか、もっと乱雑に積み重ねてあつた二十巻の最後が「国譲

下」に当たっていたかとも思われます。それを巻末として識語を書いたのが上野本で、その偶然の積み重ねを巻序と心得て序数を書き加えた結果があの混乱を極めた板本の巻序だと推定する方が事実に近いかも知れません。幸い、上野本には余計な序数がなく、季貞書写のまま無巻序になっているところから、その親本の又祖本は「岡萩」二本と共に、かなり古い時代に遡り得る、即ち、読者が年立も考えず、巻序にも惑う事もなく、次から次と楽しんで読んだ——創作年代を余り離れていない事を想定させます。

この想定が誤でないならば、現存うつは物語諸本の祖本は、原典に近いある形態(例えば無巻序等)を保存したまま現在に伝えていると言えましょう。この無巻序の祖本が転写されて行く間に、題紙が剥がれたり綴目が切れたりして巻名と本文の一致しないものが数巻生じ、それが上野本のように無巻序のものと、板本や東大本のように巻序の混乱したもの、多少順序は違っても永禄十一年書写本、狩谷望之本、平瀬本、新宮城本のように原典に似た巻序の第一系統や榊原本其二、長憲本、刈谷本、文化板本等のように第二系統に属する数本として現存していると見られましょう。わけても本文比較によれば、板本系(板・上・東)と同類と見られるのが第一系統で、第一系統に類するのが第二系統の数本です。或は残る第二系統諸本も第一系統に類するものかも知れません。

第三系統は第一・第二系統のように巻名本文不一致がない点だけでも、板本系ではないと言えるでしょう。この系統の二十巻本に無巻序の「岡」「萩」二本があるように、十六巻本にも無巻序(「考」書入古本)のある事を知った時、それと全く巻名巻序の一致した古本(但し前者の「春日詣」がこれには「三のならひ」とある)が十六巻本で、その前者の巻名と全く一致するのが第三系統二十巻本(「前」本以下)であるという事実から、二十巻、十六巻の差は「並び」又その序数如何にある事がわかります。しかも、無巻序の古本の「沖津白波」には「付かつらの巻」があり、第三系統二十巻本にも「沖つ白波、付かつらの巻」とある一致点からも両者は、少くも巻序の上では同一の類に属すると言えましょう。そして「付かつらの巻」の本文には、巻名に現れると否とに拘わらず、次に述べるように「流」系統全体に互って「桂」巻と「春日詣」の巻末とが竄入しています。

以上板本系と巻序による三系統との関係は甚だ複雑ですが、約言すると、原典は無巻序本であって、年立を必要とする

頃に巻序本が生じながら無巻序も依然存続し、その一つの巻名の本文不一致本から永禄十一年本、上野本（元禄四年）の祖本が派生し、上野本の祖本から上野本と、延宝五年板本の親本及び東大本―混乱巻序本―が派生しました。板本にある振仮名その他は、東大本朱書とほぼ一致します。永禄本の子孫が第一・第二系統に分れ、第二系統の中には本文巻名不一致を訂正したものが出ていますが、以上の派生本は巻名本文不一致本を祖とする板本系に統合され、第三系統と対立するという結論になります。ところが、巻名と本文錯簡竄入から、以上要約された結論と深い関係を持つものがあります。

「梅の花笠」「春日詣」と「桂」と「田鶴の群鳥」

一 イ「春日詣」と「桂」と併せた一卷

ロ「桂」巻がない

板上東長宮（櫛二欠）掖居前  
兼内萩静 補（櫛一紀岡）

ハ「桂」巻は別巻

二 「桂」巻に三カ処の錯簡誤脱がある

板上東宮櫛一

三 イ「桂」巻末にあて宮巻末本文竄入

板上東櫛一

ロ あて宮巻末落丁

板上東櫛一 櫛二

四 田鶴群鳥巻末に「春日詣」巻末二十八行と「桂」巻とが竄入 流―板上東長宮櫛二櫛一兼内静掖紀前居岡萩

右の中、二・三は板本系の特異性であり、第四項目は流布本全体に互る共通の誤ですが、注意すべきは第一項目です。「一イ」の諸本は「一ロ」の諸本と対立します。「一ロ」の諸本の中、「櫛一紀岡」三本は「桂」を補筆しているので、もともと「桂」を欠くものとして、この類に入れました。面白い事に本文の上からは「櫛一兼内静」は一群を成しています。且つ「内静」は慶長十五年（一六〇〇）本の流を汲むものです。「岡萩」は別に一群を成します。

「一ハ」では「桂」が別巻だという事は「春日詣」と並ぶだけで、実質上は「一イ」と一致します。しかし「一ロ」の場合が起り得る条件は「一ハ」に於いてであって、「一イ」のように、一卷に纏めてある中から「桂」だけが脱落する事はありませんと見るべきでしょう。「一ロ」は五本まで「春日詣」の巻名を持つ点にも関係があるようです。大体「桂」を併

せた一卷(「一イ」)は「梅の花笠」の巻名で、「一ロ」とは凡そ縁がないと思われるのに、「一ロ」の「榊一岡」は「梅の花笠」の巻名を持っています。「榊一」が板本系に似ている点を述べましたが、次の例は「一イ」である板本系が「一ロ」の性格を持つ事を証明する不思議な事実です。

これは独立した現存本ではなくて書入イ本です。長意本の「梅の花笠」巻の上欄に「一本御かへしなより嵯峨院の巻につゞきて、かくて中宮よりおほきおとゞへその日云々とつゞくなり」とあり、また家本延宝板本(青谿書屋旧蔵)にも「一本御かへしなしまでにてこの下文なし じきにさがのいんのまきとつゞきてかくて中宮よりおほき大臣の其日のごようざり聞ゆべき事なんある云々とつゞく也」と朱書があります。「御返なし」は「春日詣」の終で、その間に「桂」を入れず、直ぐに「嵯峨院」巻へ続くとあって、「桂」を欠く「一ロ」と一致します。ところが「嵯峨院」の巻名で本文は右のように「国譲下」である点から板本系と推定したのですが、この書入二本が「一ロ」と一致し、且つ板本系だという事実は、「一ロ」の七本中にも、板本系のものであるかも知れないという推定を可能にします。「榊一」は補筆の「桂」巻で板本系と一致し、「桂」自身に錯簡がある上にその後「あて宮」巻末の本文が竄入していますが、この一致は「榊一」全体とは関係がなく、補筆の本文はそれ自身板本系から採ったものになっているとして、それ以外の巻は板本系とは関係ない筈なのに、三口「あて宮」巻末の落丁が「榊一」にもあるという事実から、板本系の混合本だと言えるのです。「榊二」で「あて宮」巻末の落丁になった直前の「所々より」の下に「わさするほどになりけるをかくなんとも聞えでやとてなん」と加えてあるのは後人の書入で、本文は板本系と同様落丁です。「榊二」は「梅の花笠」巻一卷を欠いているので、一二三イに關する点を知る由もありませんが、もし欠けていなかったら、板本系と一致したろうと推定出来るのは、特に本文と巻名が不一致の点で板本系と同じだからです。「榊一」は「国譲下」「嵯峨院」「藏開下」に本文との不一致はありませんが、「長」よりはずっと板本系に近いと言えます。以上によって、「一ハ」と同様に、「一イ」も「一ロ」とっては不可能と思われる「一ロ」の現象が起り得る事を知ったわけです。しかも案外、この不可能事が不可能事でなかった事を、「一イ」の書式即ち「春日詣」と「桂」との接ぎ目が教えています。「板」「上」を除いて、「東」「長」は、春日詣の終「御返なし」から「桂」へ移るのに行を改めていますし、「宮」「板」「前」「居」は、料紙を改めて次の表から新しく「桂」を書き始めて

います。こういう書式は、うつほ物語の写本群には和歌の改行以外に殆ど見られないものですから、改行または別紙に記す本文とその前の本文とは曾ては別箇のものであった事を表示していると考えます。そうだとすると「一ハ」と対立する「一イ」も、曾ては「一ハ」だったのではないか、即ち室町時代前後には「春日詣」と「桂」とが別巻であったのに、後一卷になって、名も「梅の花笠」と改められたのだと想定されます。

ところが、これを否定する項目が次に待っていて、四の「田鶴の群鳥」巻末に竄入する本文の問題を提起します。この竄入本文が「桂」だけならば「一ロ」と「一ハ」と相照応するだけで至極簡単ですが、その前に插まった二十八行(板本)の「春日詣」巻末の本文が事を複雑にします。この本文はまた不思議な事に、現存諸本では殆ど一致して「梅の花笠」巻にある本文よりも誤が少く、現に本書ではこの竄入本文を棄てずに「梅の花笠」の本文設定に役立たせた程です。そこでこの竄入本文は現存諸本にある「梅の花笠」が曾て「春日詣」と「桂」との二巻であった時よりも前のものではないかと考えます。「桂」を併せて「梅の花笠」巻となった後の落丁ならば、現存本の一本位は「梅の花笠」巻に「桂」ばかりでなく「春日詣」の巻末も共に脱落していい筈ですし、先に述べたように竄入本文の方が現存する「梅の花笠」巻の本文より優れているという事もあり得ないからです。この想定が許されるならば、現存の流布本系の「梅の花笠」の巻名は二巻併合後のものであり、「九」系統本のように竄入もなくその他の誤もない「梅の花笠」の巻名は二巻分裂以前のものの転写本ではないかと想像する事が出来ます。

「考」書入の古本には「たつの村鳥」に「古名此名なし」とありますから、「沖つ白波」の方が古いのでしょうか、第三系統二十巻本には前田家本を初め本居本、紀氏本等の「沖つ白波」に「付かつらの巻」の傍書があります。ここに竄入本文があるという注記とは違って堂々と巻名にしているのは、本文が「桂」のみならず「春日詣」の一部まで一緒に竄入した事実を全然知らないと思われる極めて不見識な題だといわなければなりません。この中で「紀」は「一ロ」に属している同本です。

要するに錯簡竄入の問題から見た流布本系諸本の祖本は「春日詣」から別れた「桂」が巻名となる以前に、「梅の花笠」巻が恐らく胡蝶装の巻末の一帖を脱落し、その一帖が偶然「田鶴の群鳥」の巻末に併せ綴じられ、暫くして「梅の花笠」巻

の脱落を他本によって補ったのに、「田鶴の群鳥」巻への竄入本文は削らなかつたもので、その頃「嵯峨院」と「菊の宴」に重複本文の混乱を齎らし、それと前後して板本系の誤となつた巻名本文の不一致が生じ、その後、板本系が更に「桂」の錯簡誤脱、「あて宮」巻末の脱落、「梅の花笠」の巻末への竄入という誤を重ねたのだと想像する事が出来るでしょう。その間にあって板本系と対立する「棧前居」の類と「兼内静紀岡萩」の類とを併せた一系統を想定する事が出来ます。これらは巻序から見ると、第三系統の十六巻本と二十巻本に帰属し、板本系と同じように「梅」「田」の錯簡竄入があり、「梅」の「一イ」「一ロ」の対立が板本系統と輻湊して極まるところを知らない有様です。

茲にとにかくも二十巻全部を校合し調査し検討しその善しと思われる本文を採択して、曲りなりにも古典大系本「宇津保物語」を世に送るに当って、その間に試みた本文批判が教えるままに諸本の系譜を作つて大方の教示を俟たいと念願しましたのに、時日がそれを許さず、残念ながら後日の発表を約してここに筆を擱く事に致しました。この本文校定に最も役立つた九大本系については「うつほ物語異本の研究」(共立女子大学紀要第二輯)に譲ります。

### うつほ物語年立設定について

年立設定は、うつほ物語の読解に対して一つの鍵とも言えましょう。しかし当時の読者には「むかし」という一言で、過去の或る時代が活々と展開したに違いありません。「嵯峨の御時」だけで十分なのですから、国家の重大な儀典である讓位及び即位にしても「年月すぎてその時の帝もおり給ひ春宮国しり給ひ」と二言三言添えれば物語は進行します。初雪にむつき(正月)を、花に春を思い浮べ、四季それぞれの行事を小松引き、菖蒲の節、祭、七夕、なごし(夏越)の祓、菊宴と挙げれば暦を俟つまでもありません。「二十三年といふ年三十九にて」とか、「この子三になる年の夏頃」とかで年齢もわかります。

ところが作品成立後、百年二百年を隔てると、語義も変り習慣も移るために、読者が簡単に作品と融合する事がむづかしくなります。従つて注釈はもとより読解のためにも年立は必要欠くべからざる目印となつて来ます。しかし年立設定の点では極めて容易な源氏物語でさえ主人公の年齢に動搖を來たしている位ですから、長篇の始祖、うつほ物語が年代年齢に関する疑問の数々を含むのも止むを得ない事

でしよう。述作に費した長い期間には作者の思い違いから、人名、官職、事件、場所等の矛盾が避けられなくなりそうです。そこで年代設定を試みる者も作者の側に立って少々な過誤には寛大な態度を失わず、ひたすら作者の本意を探り意圖を辿ってその赴くところに随う心構がなければなりません。特に作者を生んだ時代の環境、風俗、習慣、文化の程度、とりわけ時代精神を察する必要がある。既に作品の展開が必ずしも合理的に行われないのでから、その年立も常に数学的には計算できません。そういう状況の下に客観と主観の間を縫って年立設定を試みる際には、勢い読解の深度が、巻序の決定にも見られたように、幾種かの年立を想定させる事になります。『嵯峨院』と『梅の花笠』、『初秋』と『田鶴の群鳥』、これら二巻の前後をきめるにも、両巻相互の關係を見るばかりでなく作品全体を眺めなければなりませんから、結局は設定者の説得力が物を言うような微妙な場合まで出て来ます。こういう心構は別としても、特にこの物語の研究に必要な基礎的準備として次の二項目を挙げたいと思います。

1 妥当な巻序を選ぶ事 巻序は言わば年立を測定するための物尺です。最も妥当な年立は最良の巻序によらねばなりません。ここにはそれに近いものとして第四系統の巻序二十巻を採る事にしました。この系統が果して最良の巻序であるかどうかは、逆にまた年立が規定する事になりますから、この際年立と巻序とは相互に検討すべきだと考えます。且つ巻々の位置を定めるのに、作者の意圖を忖度して客観的条件と見合せて行く用意が必要なのは言うをまちません。

2 本文の問題 原典に近くて誤の少い本文を持つ善本を求める事が殆ど不可能と言うべき現状にあっては、現存諸本を少しでも多く蒐集し調査して、精密に校合し厳正な批判を加える他にはそれに近づく途はありません。

本書に於ては流布本系の延宝五年板本を底本とし、十二の写本を校合しました。しかし流布本系は巻序の乱れのみならず、既に度々述べたように「梅の花笠」巻をはじめ「藏閣下」「国讓中」「樓上上」などの諸巻には錯簡竄入があり、「嵯峨院」「菊の宴」の両巻には重複本文があつて、甚だしく読解に苦しみますし、重複本文については、重複を認める二元説と「嵯」また「菊」一元説との間に行われた論争が江戸時代から課題を提供して、今日なお未解決の有様です。幸いここに重複本文のない、且つ錯簡竄入も殆ど全く見られない九大本系があつたお蔭で、ともかくも二十巻の校正を果し、うづは物語の読むに堪える本文を眼の前に見ることができました。確かに流布本系諸本に比べては善本と言える九大本にも誤脱がないわけではありません。本文の校訂は最後の巻まで困難を極め未詳の項目も数を増してきました。その都度「玉琴」の本文が救いの手をのべてくれた事も屢々です。その出処を質す暇もなく読解のためにそのまま採る他なかつたのは、流布本諸本と九大本を通じて誤脱未詳の続出に苦しんだ証拠でもあります。

嵯峨帝

(俊隆生誕から63年)

朱雀帝即位

(13年)

一 俊隆  
(俊隆生)

12元服

16遣唐使

(23年)

39帰朝

42婚

46琴を教ふ

(俊隆女)生

12使文

54 57歿・北方も

5 20瘋死す  
6 21うつ住み

28父子夫婦邂逅

16元服

18侍従

19八月相撲違變

二 忠こそ  
(千蔭生)

(北方)14

16

20歿

(忠こそ)生

10昇殿

14出家

45薨去

三 正頼  
(正頼生)

(大宮)14

15

(仁寿殿)17

18

(あて)生

12菰着・懸想人  
13七夕・懸想人  
14夏・懸想人

うつほ物語年立表一

うつは物語年立表二

一 俊 隆

八月二日兼雅相撲還養準備  
正頼正客  
仲忠仲純兄弟の契

俊隆卷末最後の年  
仲忠十九歳  
兼雅三十四歳  
北方三十四歳

二 忠 こ そ

(忠こそ三十二歳)

忠こそ卷末最後の  
年から十八年目

三 藤 原 の 君

三月あて宮装束着  
四月懸想人達

三月懸想人達  
四月懸想人達  
五月懸想人達  
六月懸想人達  
七月七日正頼七夕祭賀茂川  
懸想人達

夏 懸想人の歌 夏虫・か  
やり火

藤原の君卷末のあて宮  
十四歳の所は疑問があ  
る

四 嵯 峨 院

仲忠二〇  
あて宮一三〇

八月兼雅相撲還養  
仲忠仲純を訪問  
懸想人達、仲忠其一人  
仲純となる  
仲純八君に告白  
九月正頼月宴  
懸想人達  
仲頼の事 北方

一月十八日賭弓、仲頼あて  
宮を垣間見る  
一月廿七日嵯峨院御賀  
懸想人実忠の事 真砂  
君の死  
十二月懸想人達

一月懸想人達  
仲忠・阿蘭梨  
藤英

仲忠二十歳―二十二歳  
あて宮十三歳―十五歳